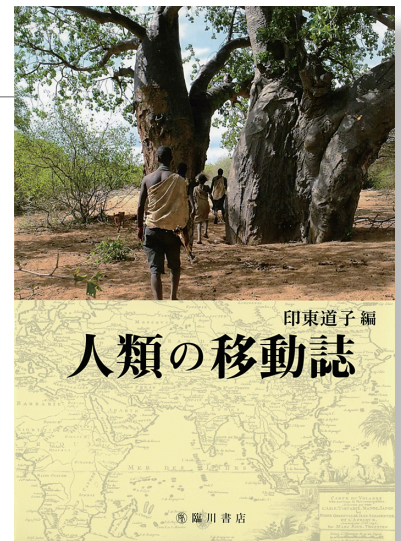


人類の移動誌

印東道子編
臨川書店 / 2013年 / 本体 4,000円 + 税



赤道直下の熱帯や極地のツンドラ環境、アンデスのような高山地帯やイースター島のような島しょ環境など、地球全域に分布している人類の暮らしや文化は多様性に富んでいる。動物のひとつの種で、これほど広い分布地域と、これほど多様な気候環境で生活を続けてきたのは人類だけである。

「人類はなぜこのように広い地域へ移動したのか、いつ移動したのか、どうやって移動できたのか」などを多角的に検討したのが、民博の共同研究「人類の移動誌：進化的視点から」（2008～2012年、代表：印東道子）であり、その成果をまとめたのが本書である。

「移動史」ではなく「移動誌」としたのは、単に人類がどのようにアフリカから世界中に拡散したかを復元するだけではなく、なぜ移動したのか、なぜそれが可能だったのか、異なる環境へも移動できた背景には、どんな文化的、社会的な背景があったのか、などにも目を配って総合的に人類の移動を考える内容にするためであった。研究会の参加者25人（特別講師を含む）によって執筆された本書の多岐にわたる内容は、以下のような構成になっている。

第1章では、700万年前にアフリカで誕生して以来、旧人までの人類が熱帯地域を中心に暮らしてきたのに対し、我々新人（ホモ・サピエンス）は極寒地域や海洋地域などへも拡大して分布した歴史を概観し、なぜ熱帯雨林地域から移動できたかなど、移動の原点について、霊長類研究者からの視点も加えて概観されている。また、昨今めざましい進展を見せている遺伝学（分子人類学）研究が、人類の系統関係を明らかにすることで、世界各地に点在する人類遺跡を線でつなぐ根拠を提供しつつある様子も紹介されている。

本書のコアとなる第2章から第4章では、アフリカからアジアへ、日本へ、アメリカ大陸へ、そしてオセアニアへと移動したホモ・サピエンス集団の、移動の経路や年代、文化的特徴などが、章ごとにまとめられている。考古学資料が中心になっているが、「ネアンデルタールとホモ・サピエンスの能力差や混血の可能性」「移動先で先住集団に出会ったときに何がおこったか」など、人類生態学や遺伝学研究の成果も織り込まれている。

第5章では、人類の移動を効果的に検証するために使われる手法が紹介されている。具体的には、言語、歯の形態的特徴、年代測定術、ゲノム解析、同位体生態学の五つの分野において、「この資料をこのように分析すると、人類の移動のこんな側面がわかる」など、具体的な例を使ってわかりやすく解説されている。特に、歯や骨の同位体比を使って食性を復

元する同位体生態学からは、「人類はいつ雑食になったか」「海産物の利用はいつからか」などの研究成果が報告されている。それと共に集団の中に異なる食生活をしてきた個体がいれば、婚入してきた可能性までわかるようになってきている。

第6章では、人類の移動を総合的に討論した最後の研究会の様子が紹介されている。この共同研究会は、異なる専門分野で活発に研究をしている20人が3年半にわたって「人類の移動」に関して討議を重ね、多様な考え方が出会う中で知的な刺激や新しい考え方が生まれる場ともなっていた。しかし、個別の論文を掲載するだけではこのおもしろさを紹介しきれない。そこで、総合討論については座談会形式のまま所収してある。同じ分野の研究者だけでは気がつかないような視点からの疑問やコメントが行き交う討論のおもしろさや重要性が感じられるものになっている。内容的には「人はどのようなどきに移動するのか」「何がその移動を支えたのか」「人にとって移動とは何か」という三つのトピックを中心に、話し合われている。

討論では、人類が移動を行った背景には、気候変動の影響や好奇心などの存在が指摘された。また、移動を可能にした要素として、道具を作り出す能力や、情報を伝達してそれを共有する能力の獲得、そして、家族をコアとする集団内の協力関係の存在などが話し合われている。最後に、人類は本質的に移動する動物であり、「ホモ・モビリタス（移動する動物）」という名がふさわしいことが再確認されている。

以上のように、本書は、単に個々の研究者の研究成果論文を集めたものとは一線を画している。各執筆者は「移動」という問題意識を共有した上で、それぞれの研究分野の成果を使って「移動」を考える新たな視点や知見を提供している。氷点下40度を超える極寒の地になぜ移動できたのか、見えていない島にまでどうやって海を越えて移動したのかなど、我々人類の壮大な「移動誌」を考えるヒントが満載された一冊になっている。

文 印東道子

国立民族学博物館民族社会研究部教授。専門はオセアニア先史学、民族考古学。天然資源に制約のあるサンゴ島に暮らす人々の居住史および生存戦略を、考古学的手法を用いて研究している。著書に『オセアニア暮らしの考古学』（朝日新聞社2002年）、編著に『人類大移動』（朝日新聞社2012年）、『オセアニア学』（共編、京都大学学術出版会2009年）、『生態資源と象徴化』（資源人類学第7巻、弘文堂2007年）など。